

社会参加活動から自己実現へ

～障害のある人の創作(芸術)活動～

近年、障害のある人が創作する作品に対する芸術的価値が見直されています。

創造性豊かな作品が、市場において高値で取引されることもあります。

このように、障害の有無にかかわらず、個性あふれる才能が芸術的に評価され、

それを市場につなげるしくみが構築できれば、障害のある人の就労や自己実現の可能性はさらに広がります。

今回は、住吉総合福祉センターの取り組みを一例に、アートによる障害のある人の

就労、自己実現について考えてみたいと思います。

才能を見過ごさないために

絵を描いたり、陶器をつくったりといった創作活動は、自身の「楽しみ」や「生きがい」になるとともに、障害のある人にとっては、自己表現を通じて、人や社会との接点をつくりだすうえで、重要な側面を持ちます。

一方で、創作活動には、芸術的な側面があり、このことは、障害のある人の創作活動においても、例外ではありません。「福祉」の枠を超えて、「芸術」の世界で、その個性や才能が評価される可能性を秘めています。

しかしこれまで、障害のある人の創作活動は、「生きがい」「楽しみ」は創り出しているものの、芸術的な側面からの価値について、深く検討されることは、多くありませんでした。

作品が説明される際、「障害のある人がつくった」という前置きがなされることが多いことも理由のひとつと考えられます。しかし、芸術的な側面からみた場合、個々の魅力をとりあげることなく、「障害のある人の作品」と括られてしまうことは、その才能や価値ある作品が見過ごされてしまう危険性があります。

プロの評価・コーディネートも重要な要素

企業における障害のある人の実雇用率は1.63%(平成21年6月1日現在)。従業員56人以上の民間企業に対して定められた法定雇用率1.8%に達する企業割合は45.5%にとどまっています。

障害のある人の就労人数は、年々増加して

いるものの、全体からみれば依然として進んでおらず、とりわけ知的障害のある人の雇用率が低い状況にあります。また、障害のある人が通う代表的な職場のひとつ、障害者小規模作業所では、一人ひとりの個性を活かした取り組みを行うために、日々、試行錯誤を重ねていますが、制度や環境の限界もあり、なかなか十分ではありません。何より、労働の対価として支払われる賃金だけでは、安定した生活を送ることが難しいといっていでしょう。

こうした状況にあって、障害のある人の創作活動が見直されています。障害のある人が自分の個性を活かして働き、作品の芸術性が評価され、商品化されて市場に出れば、収入を得る手段になるとともに、自己実現につながる可能性があります。

とはいえ、彼らの才能、創造性豊かな作品に対する評価を市場につなげるには、いくつかの課題があります。

まずは、市場において一定の評価を得なければなりません。そのためには、福祉や行政関係者でなく、プロのアーティストや現代美術関係者など専門家によって、作品が真に評価されることも重要な要素の一つです。

また、取引に関する法的な知識、著作権保護、障害のある人が自ら行うことが困難な手続きの代行など、これらに一貫して関わることのできるマネジメント機能も必要でしょう。

○住吉総合福祉センターの場合 『世界でひとつのTシャツ展2010』

住吉総合福祉センターでは、陶芸やギターなど、さまざまな文化教室を実施しています。そ



▲個性あふれる作品が集まった『世界でひとつのTシャツ展』。展示会場募集中!



▲人気投票、ベスト3のTシャツ

▲カラフルな作品が会場を飾ります

▲絵に合わせて、袖の形やサイズもさまざま

の一つとして、2006年の秋に絵画教室を開講。2010年春までに計6回行われ、毎回30人余りが参加しています。講師は、ニューヨーク出身のアーティスト、ヒューズ・ロジャー・マシューさん。これまで教室の講師は、その分野を得意とする職員が教えていました。なぜ今回、プロのマシューさんを講師に招いたのか、館長の原田徹さんに伺いました。

「障害のある利用者さんの作品は、ユニークで魅力的。利用者さんの中には、プロのアーティストとして通用する人もいないかと思っていました。しかし、才能を世に出すには、作品に対する芸術的評価が不可欠です。そう考えた時、私やスタッフの力では限界がありました。マシューさんなら、彼らの才能を発掘し、作品をアートとして評価してくれるだろう。また、その評価は周囲を納得させられるはずだと考えたからです」

マシューさんの指導のもと、教室では、障害のある人がいきいきと創作活動をしています。その様子をみながら原田さんは、「作品を発表する機会をつくり、展示を通して芸術的なセンスに障害の有無は関係ない」ことを地域に訴えていきたいと考えました。彼らの作品に刺激を受けていたマシューさんも、作品を公表し、いずれは故郷ニューヨークの障害のある人とのアートを通じた交流に発展させたいと考えていました。

このような想いを実現する第一歩として「世界にひとつのTシャツ展」が企画されたのです。日頃から「作品の見せ方が大切」と感じていた原田さんは、マシューさんへ障害のある人が描いたオリジナルの絵が最も活きるよう、その見せ方について相談しました。

Tシャツ展のポイントは、障害の有無を一切出さなかったことです。「障害のある人がつくった」とわかれば、先入観が入り、作品としての評価がしづらくなる可能性が否めなかったからです。障害の有無、老若男女問わず、Tシャツにプリントする絵画を募集した結果、100点の

募集に、230点が集まりました。

「自分が買うなら・着るなら」

Tシャツ展は、さまざまな人が立ち寄る公共の施設で巡回展示されています。

来場者アンケートに記入された感想には「力強さやいきいきした感じが気に入った」(40代)、「見てやさしくなれる、たのしくなる」(60代)、「この個性がすごい」(50代)、「あたたかい色を使っていてほっとできる感じがした」(40代)、「カッコいい」(10代)「シンプルだけど粋から自由な感じと、重厚な質感が良かった。単純に欲しいと思った」(30代)など。

「これまでも、障害のある利用者さんの作品を販売する機会がありました。来館者に『障害のある人がつくったのに、こんなに高いの?』と聞かれることもありました。「障害のある人=できない人」「障害のある人の作品=水準以下」だという偏見や潜在意識があるのかもしれない」と原田さん。

今回のTシャツ展では、来場者により、好きな作品への投票も行われましたが、「自分が購入して着てみたいものを選びました」に類するコメントが多く、すでに「商品」としての評価がなされていることがわかります。「誰がつくっても、魅力的なものは魅力的である」というメッセージが伝わったようです。

「できない」のではなく、 「できる環境にない」だけ

「障害のある人を“できない存在”だと思っている以上、対等な立場での就労はできません。できないのではなく、できる環境がないとい

うことに気が付かなければならない。ところが、障害をきちんと理解していないから、どうしたらその環境をつくることができるのかわかっていないのです」と原田さん。

ちなみにセンターでは、障害のある人が働ける場としてラーメン屋を併設。店内では、目で見て理解できるコミュニケーション支援のひとつ、「視覚支援」を徹底しています。

「知的障害のある人の中には、耳から入った情報を頭で整理するのが苦手な方も多くいます。ところが、ラーメン作りの工程を一つずつ具体的に写真で示すことで、レシピどおり、安定した味を提供できるようになるんです」

今回のTシャツ展を機に、障害のある人の創作活動が就労につながるしゅみを整えていきたい、と原田さんは話します。そのためには、「買ってあげる」でなく「買いたい」商品づくりが先決。来年度は、今年の人気があった絵を一枚のTシャツにして、2010年のベストデザインTシャツとして限定販売を、再来年度以降は、障害のある人が描いたオリジナルの絵を西洋陶器の皿やコップに転写したり、オリジナルの絵をさまざまなグッズへと商品化し販売したい、と抱負を語ります。

「将来的には、ファッションをはじめ、さまざまな業界のバイヤーやプロデューサーがやってきて、『このアーティストに頼みたい』と依頼がくるようになればいいですね。センターはこれを仲介し、アーティスト(障害のある人)当人ができないことをサポートしていきたいです」と原田さん。当面は、一般企業にも売り込みをかけるなど、販売ルートの模索が課題となりそうです。

住吉総合福祉センター 運営：社会福祉法人ライフサポート協会

住吉総合福祉センターでは、総合生活福祉相談、文化教室・講座・催し物、ボランティアコーディネート、リハビリ、貸館事業等、福祉に関する様々なサービスを実施しています。
〒556-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-8-3 ☎06-6678-7572 FAX06-6678-7573

マシューさんへインタビュー

だれにでも障害はある。 障害のある人同士が尊敬し合って生きることが大切。

—**絵画教室では、どのようなことを教えていますか？**

道具の使い方を説明するだけで、何も教えていません。あとは彼らの創造する世界へ私がついていくというスタンスです。音楽を例にあげるならば、ギターの弾き方を教えるだけでいい。あとは、その人の感性で、プレスリーにも、ジミ・ヘンドリックスにもなれるというのと同じことです。

—**障害のある人の描く作品に、何を感じますか？**

線、色づかい、私からは決して生まれないものばかり。物事を複雑につくりこまないため、シンプルで力強いエネルギーがあふれています。涙が出るほど感動することも少なくありません。彼らの個性や才能に出会える、絵画教室の時間は、いつも私をワクワクさせてくれます。教室がいつ終わったのかわからないくらい夢中になります。

—**Tシャツ展では、具体的にどんなことをされましたか？**

まず、200を超える応募作品の中から、優れた作品81点を選びました。Tシャツの襟線や袖の色、絵を色枠で囲むなど、絵そのもののオリジナリティが最も美しく映え、なおかつ人にインパクトを与えるように工夫しました。彼らの才能を多くの人に伝えるには、素のままみせるのは賢明ではありません。コーディネートが必要です。

そうすることにより、商品価値は確実に上がり、企業の協賛や社会貢献事業へと発展する可能

性も高まります。私は、彼らの作品をベストの状態で見せなければならぬのです。

—**マシューさんにとって障害とは？**

障害は特別なものではありません。みんなにあるものです。誰にでもできること、できないことがあるでしょう？たとえば、私は日本語が読めません。それは障害。できないことはみな障害。そう考えた時、「障害」は、私のなかで大した意味を持ちません。一番大切なのは、それぞれ障害のある人間同士が、尊敬し合って生きることだと思います。

—**障害のある人が、普通に働くために必要なことは？**

障害のある人が既存の社会システムに合わせるのではなく、障害のある人が最も効率よく働ける、個性が最大限引き出される環境を、新しく創っていくことです。ニューヨークでも、このような考え方は、ますます強くなってきています。

—**日本も、いずれそうなればいいのですが。**

アメリカでは、昨年、初の黒人大統領、オバマ氏が誕生しました。かつて奴隷として白人に仕え、選挙権すらなかった黒人が大統領になれると、だれが想像できたでしょうか。そう考えると、私は世界のどこかで、障害のある大統領が誕生する可能性は十分にあると思います。必ずなれると思います。日本社会もそれを信じて、差別のない社会へと変わっていかねばなりません。

—**ありがとうございました。**



ヒューズ・ロジャー・マシューさん

ニューヨーク出身のアーティスト。幼少の数年間をハイチで過ごす。ニューヨーク市ファッション工科大学にてファインアート学士号、New York Academy of Artにて同修士号を修了。学生時代から、内装壁画やプロデュースを中心にプロのアーティストとして活動を開始。有名なものに、ロバート・デ・ニーロが所有するレストラン(ニューヨーク)のほか、ヒルトンプラザ大阪、新丸の内ビル(東京)の中華レストランなどがある。art-HRM株式会社代表。

マシューさんからのお願い

ハイチ大地震の復興支援にご協力ください。
医療施設の建設に使われます。

2010年1月12日(日本時間)、ハイチ共和国にマグニチュード(M)7.0の巨大地震が発生し、死者20万人を超える被害が広がっています。幼少の頃をハイチで過ごしたマシュー氏は、いち早く復興支援を行いました。現在、ハイチに新しい医療施設を建設するために、募金活動をしています。一人でも多くの人の寄付ご協力をお待ちしています。

振込先

三井住友銀行 芦屋支店
普通口座 5291434
レスキューハイチ